王夫之の雑劇『龍舟會烈女報冤』をめぐって
―― 唐代傳奇『謝小蛾傳』から清雑劇まで ――

On The Chinese Opera
"LONGZHOUHUI LIENÜ BAOYUAN 龍舟會烈女報冤"
By WANG FUZHI 王夫之
―― From The Short Novel In Tang Dynasty
"XIE XIAOE ZHUAN『謝小蛾傳』"
To The Chinese Opera In Qing Dynasty ――

黄　暐

初めに

北宋の李昉『太平広記』巻四九一に唐・李公佐（字は顓蒙。）の『謝小蛾傳』[1]という作品がある。この物語は唐から清にかけて、千年以上の歳月にわたり、列伝、散文、小説、雑劇など、様様な形式によって受け継がれてきた。

唐においては、前掲『謝小蛾傳』の他に、父と夫のために復讐する物語りとして、陳翰（？－？、字は？。）の『異聞集』に「謝小蛾傳」があり、牛僧孺（779－848、字は思黯。）の『玄怪録』（又、『幽怪録』という）に、「尼妙寂」と題するものもある。両者はほぼ同じ内容を表わす。[2]

宋においては、彼女の物語は更に広い範囲で伝わっていった。前掲『太平広記』所収の「謝小蛾傳」の他に、『太平廣記』巻一二八「尼妙寂」もほぼ同一の内容である。のちに編纂された、『新唐書・列女傳』巻二〇五「段居貞妻謝」、宋・曾慥（？－1155、字は端伯。）の『類説』巻十一の「申蘭申春」、及び巻二八で「謝小蛾傳」も内容的に差違はない。

元においては、陶宗儀（1316－1407、字は九成。）の『説郛』（百二十巻本）巻一一二に謝小蛾の物語が見える。

明においては、凌濛初（1580－1644、字は玄房。）の小説『初刻拍案驚奇』巻十九「李公佐巧解夢中言、謝小蛾智擒船上盗――李公佐巧みに夢中の言を解き、謝小蛾智以て船上の盗を擒える」が『謝小蛾傳』に基づくとする。

清においては、彼女の物語は王夫之によって『鸚鵡州遊人拆字、龍舟會

烈女報冤――鸚鵡州の遊人字を拆き、龍舟會列女冤を報ずる』と題する雑劇（以下簡稱：『龍舟會烈女報冤』）に改編されて『船山遺書』に収められている。ここで、注目すべきは作者王夫之はなぜ鸚鵡という動物を選んで、その雑劇の題目にしたのかという点にある。ここにも、王夫之の創作の重要な意図があると思われるが、その点についてはのちほど説明しよう。

ところで、彼女の物語がこれほど注目されるのは何故であろうか。おそらく、親族のために復讐する意識が高いためであろうか。中国の歴史の中では、親族のために復讐する実例の数多くあるが、彼女の物語のように様様な形で描かれたものは少ない。その一方で、唐から明清にかけて、作品によって物語の長さは異なっているが、その主題はあまり変わっていない。しかし、明清の王朝の交代期という背景のもとで、前掲『龍舟會烈女報冤』を読んでみると、明らかに李公佐の作品とは異なったものとなっている。では王夫之の作品においてどのように、またなぜ変わったのか。これが本論で探求する点である。まず、人物の原型はどのようなものであったのかという点からスタートをしよう。

一、唐代における謝小蛾の人物像

謝小蛾という人物像の歴史的変遷を明らかにするには、この人物像はそもそもどういう形であったのかを考えなければならない。そこで、この物語の最も古いものと思われる李公佐によって書かれた『謝小蛾傳』の粗筋を見ていこう。

> 謝小蛾の父と夫は倶に賊人に殺された。謝小蛾は救われたが、乞食となって放浪し、妙果寺の浄悟尼に救われる。ある夜夢に父と夫が現れ、十二文字で賊の名前を示した。謝小蛾は自ら解くことができなかった。その後、李公佐と出会い、彼の助けによりその十二文字の謎を解くことができた。犯人は申蘭、申春兄弟であり、謝小蛾

は賊を殺すと誓う。後、男装して、召使いとしてあちこちを歩いていたが、一年余り後に、申蘭に雇われ、信用を得た。そして家の中で実家の物を見つけたので、申蘭の首を斬り、申春を縛り、潯陽県に自首した。太守張公は彼女の志に感激し、旌表を上したところ、死を免れた。時、唐の元和十二年の夏であった。父と夫のために仇を討った後、故郷へ戻ったところ、豪族が争って聘を求めた。嫁がずと誓っていた小蛾は泗州の開元寺において尼になり、小蛾と法名をつけた。

後に李公佐と再会したが、李公佐も彼女の「美」に感動し、『傳』を作り、以って彼女を賞賛した（彼女の「美」については結びで掲示）。

二、雑劇『龍舟會烈女報冤』

1、『龍舟會烈女報冤』と王夫之

宋以後謝小蛾の物語は広い範囲で伝えられたが、主題と筋書きはあまりかわらなかった。列伝、散文、小説など、いずれも彼女の貞節と志などを称えている。しかし、王夫之の『龍舟會烈女復讐』(3) は『謝小蛾傳』と同様に、謝小蛾の志を称えている以外は、小孤神を登場させて、世の中の邪悪を除く、弱者を助かる行為をも称えている。特に注目されるのは、原作の作者李公佐の台詞で、作者、王夫之は彼のセリフによって自分の志を表わしているように思われる。以下、『龍舟會烈女報冤』の粗筋を紹介しておく。

楔　子：謝小蛾は自己紹介した後、及びある事件がまもなく起きるということを語る。

第一折：小孤神に謝小蛾は巾幗の英雄だと言われる。夢に小蛾の父と夫の魂がやってきて、賊に殺された過程を訴えた。又、十二文字の謎を残し、賊の名前を示す。

第二折：李公佐にその十二文字の謎を解いてもらう。

第三折：謝小蛾は男装した上で李小乙と改名し、賊の家で召使いとなりながら機会を待ち、復讐すると決心した。

第四折：謝小蛾は復讐を終えた。髪を剃って、尼になった。妙寂と法名をつけた。そして、李公佐は官職を辞めて、瓦官寺で謝小蛾と再会した。

ここで、作者である王夫之（1619 - 1692）について見ておこう。王夫之、字は而農、號は薑齋、湖南衡陽の人である。黄宗羲、顧炎武とともに「清初三大家」と呼ばれる。明朝の崇禎皇帝が自縊し、明王朝が滅亡した時、王夫之は「初聞国変、悲憤不食者、数日、作〈悲憤詩〉一百韻――初めて国が変わることを聞き、悲憤して食わざること数日たり、〈悲憤詩〉一百韻を作る。」[4] と述べている。清・順治五年（1648）清朝の軍が湖南を制圧したので、王夫之は友人管嗣裘と密に衡山起義の計画を立てたが、結局失敗し、広東へ逃げた。[5] のち、桂王朱由榔の政権に加わり、行人司の行人という官職を受けた。だが、順治十一年（1654）桂王も失敗した。そして、王夫之は零陵、郴州の一帯を逃げ回った。書を著し、生徒を教えることで生活を[6] 四十年あまり続けた。[7] 康熙十四年（1675)、王夫之は衡陽の金蘭郷の石船山で家を築き、「觀生居」と稱し、自ら「船山病叟」、「船山老人」と號をつけ、人に「船山先生」と呼ばれた。[8] 清廷の「剃髪令」に抵抗する為に、〈惜髪賦〉を作り、「以完髪忠――完髪を以って忠たらん。」と述べている。康熙三十一年（1692）に亡くなった。その著作は『船山遺書』三百二十四巻に収められている。残念ながら、雑劇は『龍舟會烈女報冤』しか残っていない。[9]

既に述べたように『龍舟會烈女報冤』は李公佐の『謝小蛾傳』と物語の粗筋はあまり変っていないが、主人公謝小蛾のセリフが大幅に増加している。又、原作の作者李公佐を登場人物として登場させ、彼のセリフも増えている。即ち、王夫之の雑劇は『龍舟會烈女報冤』には、主とする登場人

物が二人いる。謝小蛾と李公佐である。それして、二人のセリフと行動から二つの主張が提示されている。

一人は官府の褒賞を捨てて世に背くことにより、一般庶民に向けて異民族政権の統治を受けなければならない場合、人々は我慢するしかないが、いずれは国のために、亡くなった皇帝のために、復讐するべきであり、国家の興亡には、一般の平凡な人にも責任がある。ということを提示している。

もう一人は官職を辞めて田舎に帰ることにより、故明王朝の官吏及び学問する者に向けて、主張をしている。孔子曰く、「士志於道，而恥惡衣惡食者，未足與議也。」（『論語・里仁』）中国古代では、「士」と言う言葉は一般的知識人の他に一定的な社会地位を持つ人間を指す。こういう人間は、「志向」を確立するべきこと。言い換えれば、王夫之はここで、故明王朝の官吏及び学問する者に、これから、異民族政権の統治を受けなければならないにせよ、異民族政権を支えることはするな、亡国の民になるな、と強調している。

2、『龍舟會烈女報冤』における謝小蛾

阿英はその文『雑劇三題』で、謝小蛾は「天地間の正気」を代表すると評価している。(10) その評価のもととなっているのは、『龍舟會烈女報冤』には、彼女のセリフを借りて、異民族政権に抵抗し、故国を復興したいという王夫之の気持ちが現れているからであろう。以下、そうした部分を示す。

我想爹爹和段郎英魂不遠，且望空祝告他者。

【梁州第七】你則解夢魂中殷勤哭訴，諒孤魂原不在海角天涯。我為你含羞更忍恨向三焦下，寬松了羅襪，解散了堆鴉，陪歡侍酒，強笑傳茶。只為你浸寒濤肉冷汀洲，不顧得軟苗條試猛虎獠牙。則愿你借江上千頃雄風，吹散他魂墜泥沙，做一個烏江夜啼烏騅馬。(11) 生和死，鋼刀一把；拼得個凜冽寒霜淬劍華斬盡秋瓜。

私は父と夫の魂がまた近くにいると思う。とりあえず空を望んで彼らに訴えよう。あなたたちは夢で詳しく遭遇を訴えてくれた。その魂が遥かな所に

いないはずだと思う。あなたたちの為に恥かしさを忍んで恨みは胸にいっぱい。女の服を脱いで男の服に着替えて、歓楽の傍に入り、無理やり笑い顔をして、お茶、お酒を注ぐ。ただあなたたちは賊に殺され、亦、死体は冷たい川にいるから、弱くて若くて女の身を省みず、虎狼のような賊と戦うことを決心した。そこで、あなたたちにお願いします。江上の千頃の雄風によって賊を吹き飛ばし、かれらの魂を泥沙に墜して下さい。私は一匹の烏江の夜に鳴く烏騅馬になろう。今生死をこの一本の剛刀に托し、生死をかけて復讐する。まるで冷たい霜のように青白く光る剣で、秋の瓜を斬るように賊の首を切りましょう。

ここで言う烏騅馬とは楚覇王項羽の馬の名前である。項羽は劉邦に負けて、烏江の辺で自殺したが、その馬は主人を愛していたため、去ろうとせず、鳴いて鳴いて、止まらなかったとされる。では王夫之は一体なぜ、このような典故を用いたのだろうか。

周知のごとく、順治元年三月十九日丁未（4月25日）、李自成の乱軍が紫禁城を攻めた際、崇禎皇帝と太監の王承恩は、煤山の寿皇亭の海棠樹の下で自殺した。その以後二人の死体をそのままあそこにいった。翌日、李自成が葬式を行ったが、弔いに参列する大臣は少なかったという。(12)

皇帝は言うまでもなく国家の君主であるが、国家を家族に置き換えてみると、皇帝にあたるのが父であり、夫である。これに加えて、王夫之が生きた時代を考えるならば、謝小蛾一家の遭遇した父と夫を殺されるという粗筋を、皇帝が自殺を余儀なくされるという明朝の運命に重ね合わせて考えていたことは容易に想像できる。つまり、この箇所では、謝小蛾一家の遭遇した悲運を嘆く詞を借りて明朝の不幸を嘆いているのである。

又、項羽とその馬の、動物ですら主人が死した後も忠をつくすという典故を借りることによって、主人の死に対して葬儀にすら参列しなかった明朝の王侯貴族たちの不忠を批判していると考えることができよう。さらに、彼の一連の行動と、この雑劇の内容を重ねてみると、この悲運を嘆くのみ

では、何の役にも立たない、謝小蛾がそうしたように、国家の君主である皇帝の死に対して、復讐すべきであることを明朝の遺臣たちに提唱していると考えるべきではあるまいか。

3、『龍舟會烈女報冤』における李公佐

李公佐には、謝小蛾の物語を記録した理由を以下のように述べる。

「志を捨てず、父と夫の讐を復するを誓うは節なり；雑處に傭保されず，女人なるを知られざるは貞なり。女子の行は唯だ貞と節において，能く終始之を全うするのみ，小娥の如くは，以て天下の逆道亂常の心を儆うに足り，以て天下の貞夫孝婦の節を觀るに足れり。余は備に前事をあきらかにし，隠文を発明し，暗に冥と會い，人の心に符す。善を知りて録さざるは《春秋》の義に非ざれば，故に「傳」をつくり以て美を旌わす。」(13)

李公佐はこういう志を高く評価するために、『傳』を作ったのである。夫馬進氏は『「烈婦」曹氏と黄宗羲』において、「「烈婦」とは、かつて中国において女性がその「貞節」を全うせんがため、あえて身を捨てた者のことをいう。「節婦」、つまり夫の死後、再婚しないで寡婦を通すことがあたりまえのごとく見られた社会では、「烈婦」は稀少価値としてより貴ばれるのが常であった」と指摘されている。(14)

しかしながら、こうした物語が事実であったかといえば、どうやら事実そのままとは言えないようである。唐代の法律である『唐律疏議』によれば個人的な復讐行為は禁止されている。それによれば、復讐のため相手を死に至らしめた場合には通常通り処罰の対象となることが明記されている。

諸祖父母、父母為人所毆擊，子孫即毆擊之，非折傷者，勿論；折傷者，減凡鬥折傷三等；至死者，依常律。謂子孫元非隨從者。

【疏】議曰：祖父母、父母為人所毆擊，子孫理合救之。當即毆擊，雖有損傷，非折傷者，無罪。「折傷者，減凡鬥折傷三等」，謂折一齒

合杖八十之類。「至死者」，謂毆前人致死，合絞；以刃殺者，合斬。故云「依常律」。注云「謂子孫元非隨從者」，若元隨從，即依凡鬥首從論。律文但稱祖父母、父母為人所毆擊，不論親疏尊卑。其有祖父母、父母之尊長，毆擊祖父母、父母，依律毆之無罪者，止可解救，不得毆之，輒即毆者，自依鬥毆常法。若夫之祖父母、父母，共妻之祖父母、父母相毆，子孫之婦亦不合即毆夫之祖父母、父母，如當毆者，即依常律。（巻二十三）

しかし、その一方で復讐心を忘れた場合には罰せられるものとしている。

諸祖父母、父母及夫為人所殺，私和者，流二千里。

【疏】議曰：祖父母、父母及夫為人所殺，在法不可同天。其有忘大痛之心，捨枕戈之義，或有窺求財利，便即私和者，流二千里。（巻一七）

玄宗は、国の法律は殺人を防ぐためにあり、敵討ちを認めれば無限に殺し合いが続くから認めない（「但國家設法，事在經久，蓋以濟人，期於止殺。各申為子之志，誰非徇孝之夫，輾轉相繼，相殺何限！咎由作士，法在必行；曾參殺人，亦不可恕。」『旧唐書・列傳第一百三十八・孝友』）と述べており、復讐であろうと殺人は認めないことを明言している。

『新唐書・列傳第一百二十・孝友』巻二一八に、唐代の親族のために復讐した事件とこれに対する裁きが列挙されている。（補足１）親族が殺された場合の復讐に対して罰するべきか否か議論はあったが、上記の玄宗の言葉が示しているように、殺人の場合は例外なく罰せられている。従って、謝小娥のような個人的復讐に対して、罪を免れるという結末は、事実ではなく、李公佐によって創作された伝奇小説であったことを意味する。こうした結末は謝小娥のばあいだけではなく、『太平広記』巻六九「張雲容」、巻一二一「李之」、巻一二三「楊収」、巻一九四「崔慎思」などに見られるもので、当時の文人をも含む人々にとっては、親族のために復讐しても、法律によって罰せられる者に対する同情であると思われる。

このような考え方を持っていたと思われる『謝小娥傳』の作者李公佐は、

王夫之の雑劇『龍舟會烈女報冤』において、一人の登場人物になった。そこでは、王夫之が、李公佐のセリフを借りて自らの異民族に対する憤懣などを表わすように書き改められている。以下の歌詞がその典型的な部分である。

【紫花兒序】弄筆尖的把丹青畫餅。(15) 持牙籌的將斛斗量沙,(16) 擁旌旄的似畫錦冠猴。(17) 空目斷長堤垂柳, 古渡扁舟。波流, 一任乾坤日夜浮。問誰是弔北渚靈均哀郢, 祝東風周郎顧曲, (18) 望長安王粲登樓？(19)

〈訳〉 彼らのすることは筆を持って墨をつけて餅を描き、まるで糧食を量るように大きな声で砂を量る。政権を握っているのは（故郷に錦を飾ろうとした）項羽のような冠をかぶったサルだ。祖国を一晩で他人のものになってしまったが、私は屈原、周瑜、王粲など、彼らのような才能を持つのに、仕えたい政権はない。

前半部では、三つの典故を使って満清政権を批判する。周知のように、李自成、張献忠を軸とする明末の反乱により、明朝の崇禎皇帝は自ら首をつって死亡した。遂に、明朝は倒れた。その際、清の順治皇帝(20)を中心とする満清政権は、「不共戴天者、君父之讐；救災恤患者、隣國之誼――共に天を戴かざる者は君父の讐であり、災を救い患を恤れむ者は隣國の誼しみである」という口実のもと、北京へ進軍し、李・張の農民反乱を平定した。それから、崇禎帝、皇后、妃、公主、先代、先々代の后妃を、皆「喪葬制の如く」葬礼を行った。『清世祖実録』巻五、五月辛卯に「諭下り、官民大悦し、皆我朝の仁義を頌し、声は万代に施す」と記す。又、科挙試験を行い、明代の陵園を守り、明太祖及び諸帝を祭り、故明太祖神牌を以て歴代帝王の廟に入れた。(21) さらに順治元年六月十六日壬申（7月19日）清朝は官吏を派遣し孔子を祭った。これは満清政権が入関以来、初めて孔子を祭ったものである。(22) そして、満清政権は「名正しければ、言順う」ものとして、中原の支配者となった。王夫之はこれに対して全く同意せず、順治十三年三月出来上がった『黄書』の「後序」で、「文明以應，竊承天

也――文明以て應ずるは，竊かに天を承くるものなり」と批判している。[23]

満清政権は入関以来、漢族の官吏、文人たちに優待政策を行った。順治元年五月、「故明の諸王にして帰ってくる者は、其の爵を奪わず」と令を下した。[24] 又、都以外の官吏、民人に諭して「各衙門の官員は倶て旧に照らして録用す。速かに職名を開報するべし」。又、「其賊を避くるため、籍に回り山林へ隠居する者にして、亦具に以て聞くものは、仍ち原官を以て録用す。」[25] とした。しかし、王夫之は李公佐の歌を借りて、後半部では満清政権の欺瞞性を批判し、また過去の功臣を例に挙げ、二君に見えること、異民族王朝に仕えることを拒否する。

李公佐の以下の歌詞も満清政権の支配の下での現状を描いたものである。

憑高北望，極目中原，好傷感人也。
【金蕉葉】顫巍巍，盧龍塞，賣卻田疇；去滔滔，清汴水，割斷鴻溝。更那堪嚮嗚嗚，古涼州，悲笛折柳。[26] 只留得箇石頭城，二水分洲。[27]

〈訳〉　高い所に立って、北の方面を望むと、中原は大いに悲しませる。我が国の土地を完全に（満清政権に）奪われた。ただ、何にも分からないきれいな汴河は東へ流れていくだけ。しかし、汴河とその上流の鴻溝は断ち切られた。又、それよりもっと人を悲しませることは、古の涼州にながれる悲しい笛の音であり、残るはただ一つの石頭城。もともと一本の秦淮河は白鷺州によって二本の川に分離された。

王夫之は地名と詩人の詩句を使って、ひそかに満清政権の入関以来、我が国の土地をまるでスイカを切るように、満州族の貴族に分配したことを批判する。満清政権は入関すると、すぐに「圏地令」を発布した。順治元年十二月、ドルコンは戸部に令を下し、「田地は尽く東から来た諸王、勛臣、兵丁人などに分給する。」[28]『乾龍宝坻県志』[29] によれば、同県の土地は、

順治元年に個人の所有地は六千八百九十頃六十四畝七分二厘あったが、順治七年になって、五十七頃九十五畝しか残っていなかった。(30)

こうした国の不幸はそのまま個人的な不幸にもつながった。以下の部分はそうした嘆きを訴えたものである。

【駐馬聽】碧海雲連，空凝望孤飛白鴈傳書怨，寒梅香淺。只高吟槎枒枯樹寄愁篇。江山滿目，都是愁人處也，乾坤何處不烽煙？哀哀寡婦誅求遍。……。

〈訳〉　青い空と白雲は遠くで一つになる。ただ、孤独の白い鴈が飛んで怨みの手紙を伝えにいくのを見つめるだけ。寒梅の香りはいまだに浅い。高吟し槎枒たる枯樹に悲しい思いを寄せるのみ。祖国はどこもかしこも人が愁えている。我が国のどこにも戦争の煙のないところはない。ああ、哀れな寡婦に対しても賦税を求めるとは。(31)

南北朝の庾信は『枯樹賦』を作って、個人の不幸を訴える。ここで、王夫之は個人だけではなく、全漢民族の不幸を嘆く。満清政権の入関以来、薙髪令、命にそむいて逃げた者についての「逃人法」があり、また、さきほどのべた「圈地令」など、清初の漢民族に対する政策としていずれも、漢民族の人々を大いに苦しめた。(32)

同時に、王夫之は清朝に投降した者を厳しく批判した。

【得勝令】……破船兒沒舵隨風轉，棘鉤藤逢人便待牽。羞天花顏面愁人見，叩頭蟲腰肢軟似綿。堪憐！

〈訳〉　こわれて舵も無くなった船は風に随って浮かぶ。棘のついた蔓草は人について行くだけ。向日葵は恥ずかしくて顔を人に見られることを愁う。叩頭蟲の腰は柔らかいことまるで綿のようで、哀れなものだ。

渡辺修氏は『己巳の役（一六二九――三十）における清の対漢人統治と

漢官吏』において、「満州民族である清朝が、漢人社会を統治するに当って、漢人の知識人・官僚の協力が不可欠であった事は、一六四四年入関の以前においても、以後においても差はない」と指摘される。(33) その結果登用された例えば、範文成、呉三桂、尚可喜、耿精忠などは、清朝から見れば彼らは功臣であると言えよう。しかし、滅ぼされた明朝から見れば、彼らは叩頭蟲すなわち敵に投降した裏切り者であると言えよう。

順治二年五月二十四日乙巳（6月17日）清軍が南京に侵入した翌日、投降した趙子龍、銭謙益らは、広い範囲に檄文を伝え、盛んに清朝の高徳を稱賛した。また、各地に向けて、速やかに清に降伏するようにと命令を出した。(34)

祖国はこのような状態になってしまったが、王夫之個人には国家の危機を救う能力に限度があり、嘆くことしかできなかった。

【亂柳葉】卻歎咱半生半生問天，空熬得鬢邊鬢邊霜練，眼對著江山江山如顫，似落葉依苔依苔蘚。庭院歸燕，銜不起殘紅片。

〈訳〉　さても、俺のこれからの人生はどうすればいいのか、天に聞きたいが、祖国のために私の生涯の大半は費やしてしまった、ところがその天下は揺ら揺らし、枯れ落ちた葉が苔の上にあるかのよう、庭へ戻ってきた燕は、落ち葉は影も形もなく銜えることもできはしない。

明朝はもう亡んだものの、南明朝はなお生きている。しかし、それは満州王朝という緑鮮かな苔の上に落ちた枯れ葉のようなもので、やがて姿を消す。でも燕にすぎぬ私にはどうしようもない。

故国の滅亡と貞節を失い降臣に対して、王夫之は悪事に仲間入りすることもできず、只だ嘆き悲しむことしかなかった。そして、国に報いる道がないと思った時、「隠逸」を選んだ。

（旦）請問恩官此行何往？（末）我抒忠無路，且自歸休。

【太平令】俺如今上三峽看黄牛暮見，聽古木清夜啼猿，百花潭黄鸝低囀，待訴與長安日遠。（旦）恩官去後，妙寂恩冤両成夢幻，亦不久恋人間了。（末唱）問龍天有縁，向西乾種蓮，把恩冤蕩然，駕一扁鐵船，重與你晴川閣拈謎兒把殘燈翦。(35)

〈訳〉（旦＝謝）旦那さま、お尋ねします。この旅はどこへ行くつもりですか。（末＝李）私は国に忠を尽くしたいがその道が見えないから、故郷へ戻って休もう。

【太平令】私は現在三峡へ黄牛を見に行き、日没まで見る。静かな夜に、梢に猿の啼く声を聞く。百花潭の中にいる黄鸝が低く呻吟し、長安に訴える日を待つがそれはまだ遠い。

（旦＝謝）旦那さまは去って行った後、妙寂にとっては個人の恩と讐はともに夢幻と為った。もう、俗世のことにこだわるまい。

（末＝李、唱う）天に問うて、もし縁あれば、西方に向い蓮を植えよう。恩も怨みも忘れよう。一艘の小さい船に乗り、再びあなたと晴川閣で迷語を解こう。そして、残っている灯心をきろう。

ここでは、王夫之は古典詩の中で使われる自然や地名、建築物を借りて、時の流れに無力な己の境涯を嘆きつつ、杜甫の詩句を借りて、再び朝廷に使える日が来ることへの期待を表明している。

以上、李公佐と謝小蛾、二人の対話である。李公佐は国の為に忠心をささげたいがその道がないので、家に帰って休もうと言う。謝小蛾は個人的な恩と怨みをすでに捨て去ったから、仏様と縁があれば、その下に行こうと言う。王夫之はこれらの言葉によって、自ら「隠逸」すべきという決心を表したのである。『黄書・後序』で、「為漢大行，忠効捐也。悲憤窮滿，退論旃也。明明我後，逖播遷也」と言った。その大意は、「皇帝の為に、祖国の為に、私は命をかけたいが、今異民族の支配者に統治されているからままならない。その怨みと悲しみを胸に抱いて、これから、遠いところへ行き、世の中のことを論じよう。」ということである。

最後に、李公佐の言葉を借りて明朝の投降した臣を責めているところを挙げよう。

（嘆介）大唐家九葉聖神孫，只養得一夥胭花賤！

唐の第九代皇帝徳宗（742年－805年、在位は779年－805年第八代皇帝代宗の長男。諱は适。）父代宗が即位すると大元帥に任じられ、安史の乱の終息に務めた。764年（広徳2年）皇太子となり、779年（大歴14年）父が崩御したために後を継いで即位した。徳宗は、唐の財政再建に尽力し、揚炎の進言に従って新しい税法である両税法を施行した。さらに節度使の勢力を抑制するために兵力削減や世襲禁止などの抜本的な改革を行なおうとしたが、これがかえって節度使の反発を招き、逆に反乱を起こされて長安を追われてしまった。このため徳宗は、784年に『己罪詔』を発して、節度使に対する不介入を約束した上で混乱を収束した。このため、徳宗の改革は短期間で失敗に終わり、かえって唐はさらなる財政難に見舞われてしまうことになった。以後、節度使の勢力はさらに強まり、唐の権力は一掃弱体化の一途をたどった。徳宗の治世は両税法の施行のためにか、『中興の治』と呼ばれているが、あまりふさわしい成果はほとんどないのが実情である。[36] だから、王夫之は李公佐に「遊女のような役に立たない官吏を養っただけ」と責めさせることで、明朝の崇禎皇帝とこれを支えた大臣たちを批判しているのである。

4、王夫之が謝小蛾の物語を選んだ理由

王夫之はなぜ謝小蛾の物語を選んだのか。その理由を個条書きにしてみます。

①、儒教の社会では、「女在室，以父為天；出嫁，以夫為天――――女室に在れば，父を以て天と為す；嫁を出れば，夫を以て天と為す。」又：

在家從父，出嫁從夫，夫死從子――家に在れば父に従う，嫁を出れば夫に従う，夫が死めれば子に従う」『新唐書・儀礼六』とされた。謝小蛾は父と夫が倶に賊人に殺され、言わば「天」がなくなり、従う人もなくなってしまったのである。また、『禮記・曲禮上』に曰く、「父を殺す讐は倶に天を戴かず。」又、『孟子・盡心上』に曰く、「人の父を殺す者は、人は亦その父を殺す;人の兄を殺す者は、人は亦その兄を殺す。」とあり、父や兄の為に復讐する古代の例が挙げられている。つまり、こうした復讐は律令には反していても、古代の儒家の道徳には沿ったものであると考えられるのである。(37)

②、道徳的には認められ、律例によって禁止された仇討ちという行為を王夫之が取り上げたのは、謝小蛾の復讐する行為そのものを賛嘆するのではなく、彼女の行為を借りて、漢民族の人々に対して異民族政権に従わずこれと戦うことを主張したかったのであろうと思われる。

③、李公佐の原作には謝小蛾の父の名前が明らかにされず、彼女の夫の名前は段居貞であったが、『龍舟會烈女報冤』ではそれぞれ「謝国恩」、「段不降」となった。この名前によって、明の皇帝の恩徳を忘れないように、絶対に清朝には投降しないようにと主張している。

④、自らの才を生かすチャンスもなく、明朝復活の可能性も乏しい、そうした時代と自らの境遇を、謝小蛾と李江左に重ね合わせている。この点については、すでに指摘した雑劇の題目に表れる鸚鵡という言葉が重要な意味を持つ。以下、そのことについて些か詳しく述べておきたい。

「鸚鵡」という言葉について考える場合、キーとなる重要な人物は禰正平である。

「禰衡，字正平，平原人也。少有才辯而尚氣傲。曹操欲見之，不肯往，操懷忿，而以才名，不欲殺之，送劉表。後復侮慢於表，表不能容，以江夏太守黄祖性急，故送衡與之。祖長子射為章陵太守，尤善於衡。射大會賓客，人有獻鸚鵡者，射舉札於衡前曰：願先生賦之。衡攬筆而作，辭彩甚麗。後黄祖殺之，時年二十六。(38)

この後、色鮮やかな羽を持ち、言葉の喋れる鳥と理解される鸚鵡のイメージは、詩の中で、才能にあふれた詩人が自らの志を表す行為と重なり合わされることになる。詩人は自らを鸚鵡になぞらえ、世に向けて、朝廷に向かって、ここに登用すべき人材があることを歌い上げるのである。唐の胡皓の詩『同蔡孚起居詠（一作裴潍詩）』も同じイメージで鸚鵡をとり上げている。（『全唐詩』巻 108. 中華書局）

鸚鵡殊姿致，鸞鳳得比肩。常尋金殿裏，每話玉階前。
賈誼才方達，揚雄老未遷。能言既有地，何惜為聞天。

ここでは、詩人は鸚鵡の姿が特に美しく、鸞鳳と同じであると賛美しつつ、胡皓自身を鸚鵡になぞらえ、賈誼、揚雄という鸞鳳のような才能を持つ人間に等しい人材であることを強調している。そして機会があれば、国と皇帝に忠を捧げようという志を表しているのである。

一方で、鸚鵡はその羽が美しく、人の言葉を真似ることができ、賢い動物であるがために、いつも篭に閉じ込められる。その有様は才能がありながら、認められない文人になぞらえられる。例えば、白居易の詩『鸚鵡』は以下の通りである。（『全唐詩』巻 441. 中華書局）

竟日語還默，中宵棲復驚。身囚緣彩翠，心苦為分明。
暮起歸巢思，春多憶侶聲。誰能拆籠破，從放快飛鳴。

ここで、鸚鵡が閉じ込められる原因は、その羽が「采翠」であるがゆえである。夜も、昼も、自然にもどりたいが、誰もその篭を破り、鸚鵡を自由にはさせてくれはしないと詩人は自らの境遇になぞらえる。

ここで白居易が、篭から自由になりたいという鸚鵡に自らをなぞらえたのは、傾きかけた朝廷に使えるよりも、むしろ宮仕えをやめ隠逸の道を選ぼうという彼の気持ちが表れていると見ることができよう。白氏の

詩『紅鸚鵡』も同一のモチーフである。(『全唐詩』巻438. 中華書局)

安南遠進紅鸚鵡，色似桃花語似人。
文章辯慧皆如此，籠檻何年出得身。

ここでは、鸚鵡が篭に閉じ込められ、いつになっても自由に空中で飛べる日が来ないことを嘆き、同時に、詩人＝文人の文采が「辨慧」つまり、才能を持つ自分のような文人がいつか自分の才能を皆に披露することができるのだろうかと悲嘆に暮れているのである。

『全唐詩』(中華書局、1990年第5次印刷。)の中には、李白の『初出金門尋王侍御不遇詠壁上鸚鵡（一作敕放歸山留別王侍御不遇詠鸚鵡)』(巻183.)、李義府の『詠鸚鵡』(巻35.)、杜甫の『鸚鵡（一作翦羽)』(巻230.)など、約二百篇以上の詩に鸚鵡が描かれ、いずれも、鸚鵡を詠うことにより、個人的な思い、志し、悲しみなどを表現する。その中で、特に重要なのは、人語を解し、鮮やかな羽を持ちながら、篭の鳥としてその魅力を発揮する場面がないことを嘆く詩の存在である。漢代の禰衡の『鸚鵡賦』とこうした詩を踏まえ、王夫之の雑劇では鸚鵡とその典故を用いて自らの思想を表現したのである。

更にタイトルを細かく見ていくと、そこから王夫之個人の愁いと不満が読みとれる。『鸚鵡州遊人拆字、龍舟會烈女報冤』の中の「鸚鵡州」とは現在武昌の西南、揚子江の中にある。東漢の禰衡はそこで『鸚鵡賦』を創ったためにその名を得た。

禰衡は鸚鵡を「西域之靈鳥」と称している。しかし、この「西域之靈鳥」は「群れを離れ、伴侶を失い、篭に閉じこめられ、その羽は切られる」という定めにあった。彼は鳥に同情すると同時に、鳥に自らの遭遇する運命を重ね合わせている。(前掲『後漢書・禰衡傳』巻八十下) 即ち、禰衡は鸚鵡のイメージを借りて、自分の才能などが認められないことへの憤怒と悲哀とを表している。さらに、王夫之はその典故を用いて、この鳥のイメージを活用し、自らの身の上に対して、強い不満を表してい

ると見ることができよう。（補足２禰衡の『鸚鵡賦』）

結び

孔子は「天下道有れば則現れ、道無ければ則隠る」（『論語・泰伯』）と述べており、これが孔子の「隠逸」に対する基本的な観点である。この観点によれば、隠逸という行為は一種の社会に抵抗する方式であるが、それはただ、「道」が行われないという社会環境の中において意味のある行為である。「道行わざれば、桴に乗り海に浮かばん（『論語・公冶長』）」というのも同一の主旨の表現である。しかし、この隠逸という行為は最終の目的ではなく、その志を遂げるための過程に過ぎないと孔子は考えていた。「隠居して以て其志を求め、義を行って以て其道に達するとは、吾其語を聞く矣、未だ其人を見ざる也。」『論語・季氏』)。従って、隠逸もまた一種の社会的な行為であり、「道」を求めて学問する「士」は、志を得られず「無道」の政治環境の下に隠逸を選択せざるを得ない時があっても、国のために、人民のために力を尽くすチャンスを待たねばならないと儒家は考えるのである。『易經 繫辭下』に「君子藏器於身，待時而動――君子器を身に藏し，時を待ちて動く」とあり、『荀子・宥坐篇』に「今有其人有るとも，其の時に遇わざれば，賢たりと雖も，其能く行われん乎。苟くも其時に遇えば，何ぞ之有るも難かたからん。故に君子は博學深謀し，修身端行して，以て其時を俟つ。」と言っているのはこのことである。

儒家にとっては、「時を待つ」の目的は「現れ――復た出ずる」であって。その「待時」の過程中にも「志」を求めなければならないものであった。だからこそ、王夫之は南明政権が敗北した以後、隠逸を選択したのである。それは、一方で異民族政権を「道無き」ものとして批判し、抵抗する気持を表し、もう一方では明王朝のために、復讐し道を復た現す機会を得るために待つことを意味した。劇中の李公佐のセリフ「我抒忠無路、且自帰休」は、まさに王夫之自身の「明明我後、逖播遷也」のそうした志を表すものと言えよう。

では、一体なぜこうした考えを表すために、王夫之は謝小蛾の仇討ち物語を題材としたのであろうか。このことに関しては、明の凌濛初の『初刻拍案驚奇』巻十九、「李公佐巧解夢中言、謝小蛾智擒船上盗」の中に彼女のことについての以下の評価が参考になろう。

> さて、今お話し申し上げますのは、大難に遭遇したがため、女が男に化け、計略を用い、苦しみに耐え、見事に仇を討ち、その志を果たした世にもまれな婦人のお話であり、まことに空前絶後の物語でございます。

王夫之が一人の女性の父と夫の仇討ち物語を題材として雑劇を創作した理由はこれと重なるものであろう。伝統的な中国社会では、女性は社会的地位が低く、社会生活の中では弱者であるため、不幸な災難に出遭った時に、貞節を守り志を果たすのは極めて難しい。まして、謝小蛾のような若く、弱い女性は、復讐しようという願があっても、それを実現できる可能性は極めて低い。しかも、謝小蛾は、『太平広記』所収の武侠小説三十一篇中の女侠八人（謝小蛾、尼妙寂、車中女子（巻一九三）、崔慎思妻（巻一九四）、聶隠娘（巻一九四）、紅線（巻一九五）、三鬘女子（巻一九六）、荊十三娘（巻一九六）、賈人妻（巻一九六）。但し謝小蛾と尼妙寂同じ人間であるから八人。）の中で唯一の武功を持たない女侠であった。だからこそ、彼女のような弱い人間が復讐を果たすという行動が、より人の感動と気概を奮い起こすことが可能だったのではないだろうか。ここにこそ、王夫之が謝小蛾の物語を選択した理由があった。

王夫之は前朝の遺臣であり、自らが仕える国が無くなっていく過程、すなわち皇帝が死に、王朝が消滅し、異民族政権の支配する環境の中で暮らすということを身を以って体験した。そして儒家の思想に基づき、この苦難に身を置きながら異民族政権に支配される屈辱にも耐え、故国と亡き君主のために復讐するチャンスを待つべきであり、そのために数年間「隠逸」することもやむを得ないと考えていた。そうした考えを表す上で、謝小蛾

という人物とその仇討ち物語は格好の素材であった。

また、謝小娥の物語を選んだ理由として、政治や社会に対して女性はどのような役割を果たすべきであるかという点について、王夫之の考え方が現れている可能性もある。王朝が更迭する際に、特に、異民族政権によって統治される時、国を救い、人民を救う責任は、男性だけが分担するのではなく、女性でもそういった責任をも持つと王夫之は考えていたのではないだろうか。順治初年明朝の遺民、松江人夏完成淳（1631 － 1647）と、其の一族の男性たちは国の為に死んでしまった。後、女性たちはすべて髪を剃り尼になった例のように、(40) 命をかけて抵抗するだけではなく、髪を剃り、出家するという「隠逸」という方法が王夫之の視野に入っていたのではないだろうか。

補足１：

唐代の親族のために復讐する例を挙げる。

『新唐書・列傳第一百二十・孝友』巻二一八

張琇，河中解人。父審素，為嶲州都督，有陳纂仁者，誣其冒戰級、私庸兵。玄宗疑之，詔監察禦史楊汪即按。纂仁複告審素與總管董堂禮謀反。於是汪收審素系雅州獄，馳至嶲州按反状。堂禮不勝忿，殺纂仁，以兵七百圍汪，脅使露章雪審素罪。既而吏共斬堂禮，汪得出，遂當審素實反，斬之，沒其家。琇與兄瑝尚幼，徙嶺南。久之，逃還。汪更名萬頃。瑝時年十三，琇少二歳。夜狙萬頃于魏王池，瑝斫其馬，萬頃驚，不及鬥，為琇所殺。條所以殺萬頃状系於斧，奔江南，將殺構父罪者，然後詣有司。道汜水，吏捕以聞。中書令張九齢等皆稱其孝烈，宜貸死，侍中裴耀卿等陳不可，帝亦謂然，謂九齢曰：「孝子者，義不顧命。殺之可成其志，赦之則虧律。凡為子，孰不願孝？轉相仇殺，遂無已時。」卒用耀卿議，議者以為冤。帝下詔申諭，乃殺之。臨刑賜食，瑝不能進，琇色自如，曰：「下見先人，複何恨！」人莫不閔之，

為誄揭於道，斂錢為葬北邙，尚恐仇人發之，作疑塚，使不知其處。

憲宗時，衢州人余常安父、叔皆為裏人謝全所殺。常安八歳，已能謀復仇。十有七年，卒殺全。刺史元錫奏輕比，刑部尚書李鄘執不可，卒抵死。

穆宗世，京兆人康買得，年十四，父憲責錢于雲陽張蒞，蒞醉，拉憲危死。買得以蒞趫悍，度救不足解，則舉鍤擊其首，三日蒞死。刑部侍郎孫革建言：「買得救父難不為暴，度不解而擊不為凶。先王制刑，必先父子之親。《春秋》原心定罪，《周書》諸罰有權。買得孝性天至，宜賜矜宥。」有詔減死。

補足２：

禰衡の『鸚鵡賦』全文を挙げる。

惟西域之靈鳥兮，挺自然之竒姿。體金精之妙質兮，含火徳之明輝。性辯恵而能言兮，才聰明以識機。故其嬉遊高峻，栖跱幽深。飛不妄集翔，必擇林。紺趾丹觜，緑衣翠衿。采采麗容，咬咬好音。雖同族于羽毛，固殊智而異心。配鸞皇而等美，焉比徳于衆禽。

于是羨芳聲之遠暢，偉靈表之可嘉。命虞人于隴坻，詔伯益于流沙。跨崑崙而播弋，冠雲霓而張羅。雖網維之備設，終一目之所加。且其容止閒暇，守植安停。逼之不懼，撫之不驚。寧順從以遠害，不違忤以喪生。故獻全者受賞，而傷肌者被刑。

爾迺歸窮委命，離羣喪侶。閉以雕籠，翦其翅羽。流飄萬里，崎嶇重阻。踰岷越障，載罹寒暑。女辭家而適人，臣出身而事主。彼賢哲之逢患，猶棲遲以羈旅。矧禽鳥之微物，能馴擾以安處。眷西路而長懐，望故郷而延佇。忖陋體之腥臊，亦何勞于鼎俎。

嗟禄命之衰薄，奚遭時之險巇？豈言語以階亂，將不密以致危？痛母子之永隔，哀伉儷之生離。匪餘年之足惜，　衆雛之無知。背蠻夷之下國，侍君子之光儀。懼名實之不副，恥才能之無竒。羨西都之沃壌，識苦樂之異宜。懐代越之悠思，故毎言而稱斯。

若迺少昊司辰，蓐收整轡。嚴霜初降，涼風蕭瑟。長吟遠慕，哀鳴感類。音聲悽以激揚，容貌慘以顦顇。聞之者悲傷，見之者隕淚。放臣為之屢歎，棄妻為之歔欷。

感平生之游處，若壎篪之相須。何今日之兩是絶，若胡越之異區？順籠檻以俯仰，闚戸牖以踟躕。想崑山之高嶽，思鄧林之扶疏。顧六翮之殘毀，雖奮迅其焉如？心懷歸而弗果，徒怨毒於一隅。苟竭心於所事，敢背惠而忘初？託輕鄙之微命，委陋賤之薄軀。期守死以報德，甘盡辭以效愚。恃隆恩於既往，庶彌久而不渝。

文中に使用したテクスト

1、『船山全集』（清）王夫之撰　台北：華聯出版社　1965 年。
2、『太平廣記』（宋）李昉等奉敕撰　清道光二十六年重刊本三讓睦記藏板。
3、『黄書』（清）王夫之撰　王白祥點校　中華書局　1956 年。
4、『初刻拍案驚奇』（明）凌濛初著　王古魯蒐録編註　上海：古典文学出版社 ,1957.9

全文の註

註 1：王夢鴎の『唐人小説研究』（二）p46 － 56、『唐人小説研究』（四）p194 － 212 台北：藝文印書舘 ,1978.10

註 2：唐代傳奇小説選集。編者陳翰。生卒年，籍貫，字號均不詳，唐末人，官屯田員外郎。『新唐書·藝文誌』著。『異聞集』原有 10 卷、已佚。晁公武『郡齋讀書誌』，它“以傳記所載唐朝奇怪事、類為一書”。《太平廣記》引有佚文 20 餘篇、曾慥《類説》第 28 卷收有 25 篇。均為摘要。現可以考知收入此書的唐人小説的代表作 40 餘篇。如《古鏡記》、《枕中記》、《任氏傳》、『李娃傳』、『霍小玉傳』、『南柯太守傳』、『柳毅傳』等。這些單篇傳奇因而得以廣泛流傳。『太平廣記』所收的一部分唐傳奇、很多是依據『異聞集』轉録的，魯迅『唐宋傳記集』、所選唐人作品、

有 22 篇曾見於『異聞集』。可見其選材較精。此書在宋代常為人引用。又混入了宋人作品。據『直齋書録解題』記載、第 7 巻裡的王魁故事、即為後人羼入。)

註 3：東洋文庫存、清・同治四年刊『船山遺書』と光緒十三年補刊『船山遺書』、いずれも、『鸚鵡州遊人拆字、龍船會烈女報冤』

註 4：『王夫之年譜』p23 （清）王之春撰；汪茂和點校。北京：中華書局，1989.4

註 5：上同。p38

註 6：上同。p52

註 7：上同。P52

註 8：上同。p86

註 9：上同。P130

註 10：『阿英全集』第七冊、p155. 安教育出版社　2000 年。

註 11：項羽の愛馬の名。亦、項羽が沛公劉邦の軍隊に囲まれて、窮地に追い込まれた時、その馬は力が尽きて鳴く、ずっと動かなかったまで、と言われる。

註 12：『清史編年』巻一、p9 － 11。人民大学出版社　1985 年。

註 13：『太平広記』巻四九一、「謝小娥傳」。

註 14：『女性史学』第 14 期、2004 年。

註 15：『三国志・魏志・盧毓傳』名如畫地作餅、不可啖也。

註 16：南朝檀道濟と魏軍を戦う、檀道濟の軍は歴城に至る、糧食が無くなった。士卒憂れう。道濟夜で沙を量る、残る米を地面に散る。翌日魏軍は至る、糧餘ある故に追わず。『南史・檀道濟傳』。

註 17：項王見秦宮室皆以燒殘破、又心懐思欲東歸、曰：「富貴不歸故郷、如衣繡夜行誰知之者。」説者曰：「人言楚人沐猴而冠耳。果然。」。

註 18：瑜少精意於音樂、雖三爵之後、其有闕誤、瑜必知之、知之必顧。故時人謡曰：「曲有誤、周郎顧。」『三国志・呉志・周瑜傳』。（晋）陳壽撰；（宋）裴松之注；北京：中華書局 ,1959.12

註 19：王粲、字は仲宣、東漢文学家であり、才能が高くて、劉表に仕えた

いが重視されなかった。ある日当陽城楼に登って、遥かに北の故郷を望みながら感嘆し、すると、『登楼賦』を作って、以って不愉快な気持を表した。『魏書・王粲傳』（北齊）魏收撰；北京：中華書局，1974.6。

註 20：清・順治皇帝、愛新覚羅・福臨（1638 － 1643）清太宗ホウタイジの第九番の息子であり、皇帝になる際六歳であった。ドルコンは清太祖ヌルハチの第十四番の息子、ホンタイジの弟である。順治皇帝の補佐であった。

註 21：『清世祖実録』巻五、六月癸未。

註 22：『清史編年』巻一。p29。

註 23：彼の『讀通鑑論』巻二十九、「五代上」の中に、ほぼ同じの議論が出した。

五代と合稱するは、其の建つる所の国號、皆、稱するにたらざればなり。朱温は盗なり、安禄山と等し。李存勗、石敬瑭、劉知遠は沙陀の三部の小夷なり。郭威は攘竊して名無し。故に名を稱す。周主栄は、始め、簒逆を謀るに與らず、命を受けて嗣と為り、而して天下を平一するの志有り。故に周主と稱す。口盗の流に愈れり。之を要するに皆、以て天子と為すに足らず。中文版：世界書局 1936 年；日文版：『續國訳漢文大成』巻 24、p869. 国民文庫刊行会刊の復刻 東洋文化協会　1958 年。

註 24：『清世祖実録』巻五、五月辛卯。

註 25：『清史編年』巻一、P23。

註 26：王之渙『涼州詞』：「羌笛何須怨楊柳、春風不度玉門関」（『全唐詩』巻二百五十三）北京：中華書局、1960.4。

註 27：二水、実は一水、即ち秦淮河を指す。秦淮河が南京を流れ通った後，西へ長江に入って白鷺洲が其の真中にいるから、二支を分けられた。洲、白鷺洲である。南京の水西門外にある。たくさんの白鷺があそこで集るから、名を得る。

李白詩『登金陵鳳凰臺』：「三山半落青天外、二水中分白鷺洲」

註 28：『清史編年』巻一、p52

註 29：『中國地方志集成・天津府縣志輯』（清）洪肇楙修、（清）察寅斗纂。上海書店出版社、2004 年。

註 30：清初の圈地の数量について、鄭天挺主編の『清史』上 p 180 － 182. 天津人民出版社、1989 年。参照。

註 31：『清史稿・世祖本紀』順治元年、頒詔天下、「地畝銭糧、悉照前明会計録。自順治元年五月朔起、如額征解」（清）趙爾巽撰；中華書局、1976.

註 32：参照：加藤直人氏の『中国第一歴史档案館所蔵「逃人档」について』松村潤先生古稀記念『清代史論叢』p183 － 202. 汲古書院、1994 年。又、拙文『清初満漢両種法律文化の対峙』華僑大学学報　哲社版 1999 年、第二期、p109 － 115

註 33：松村潤先生古稀記念『清代史論叢』p141 － 164. 汲古書院、1994 年。

註 34：『清史編年』巻一、p75。

註 35：黄牛とは、揚子江の中に黄牛峡という場所を指す。牛のような形の石があるので、名を得る。単に「黄牛」とも呼ばれる。黄牛峡のあたりは急流であるが、舟がここを通ると、一、二日を経っても、尚南岸の「黄牛」が見えるという。民謡に「朝發黄牛、暮宿黄牛、三朝三暮、黄牛如故」と言う。

啼猿は酈道元の《水經註・三峽》に「巴東三峽巫峽長，猿鳴三聲淚沾裳」とあるのに基づく。李白の詩もこれに基づく。猿の鳴く声は、詩人の悲しむ気持を表している。

百花潭は潭の名。成都の西にあり、その潭の北に杜甫の草堂がある。杜甫の『狂夫』はそれを述べる。（『全唐詩』巻 216.）

萬里橋（諸葛送費禕聘吳，禕歎曰：萬里之行始於此橋，因名）西一（一作新）草堂，百花潭水即滄浪。風含翠篠娟娟靜（一作淨），雨裛紅蕖冉冉香。厚祿故人書斷絶，恆飢稚子色淒涼。欲填溝壑唯疏放，自笑狂夫

老更狂。

杜甫は天寶五年から天寶十四年かけて、長安に十個年間あまり生活した。その目的は,「致君堯舜上，再使風俗淳――皇帝は唐堯、虞舜のごとく聖明なるべし」と期待し、自ら、その忠心、及び才能などを朝廷、国家に捧げようと考えた。しかし結局、李林甫によって左遷され、都長安を離れることを余儀なくされた。その流浪の中でたどり着いた成都での暮らしの中で、あきらめの気持ちと、長安へ戻りたいという希望とが彼の心の中で常に交錯していた。王夫之は李公左の言葉を借りて、自らの思いを杜甫の心境に重ね合わせているのである。

晴川閣は又晴川樓といい、揚子江の北岸、龜山東麓の禹公磯の上にあった。黄鶴樓と江を隔てて建てられていた。唐代崔灝の『黄鶴樓』の詩により、さおの名を得る。(『全唐詩』巻 130.)

昔人已乘白雲（一云作黄鶴）去, 此（一作茲）地空餘（一作留）黄鶴樓。黄鶴一去不復返，白雲千載空悠悠。晴川漢陽樹（一作戍），春（一作芳）草萋萋（一作青青）鸚鵡洲。日暮鄉關何處是（一作在），煙波江上使人愁。

註 36：『旧唐書』巻十三・「徳宗本紀」。（後晉）劉昫撰；北京：中華書局，1975.5

註 37：瞿同祖著『中國法律與中國社會』第一章「血属復讐」北京：中華書局。1981 年。

註 38：『後漢書・禰衡傳』。（宋）范曄撰；（唐）李賢等注、北京：中華書局、1965.5。

註 39：『王夫之年譜』p61. 又、易楚奇氏、『試論王船山的雑劇「龍舟会」』で、「『龍船会』の創作は 1654 年（順治十一）――1661 年（順治十八）であるはずだ」と指摘される。

『船山学報』1984 年、第一期。

註 40：台湾大学学報、29 号、2002 年、孫慧敏『天下興亡、「匹夫」之責？――明清鼎革中的夏家婦女』

参考文献

1、『雑劇三集』（清）鄒式金　黄山書社出版　1992年。
2、『船山全集』（清）王夫之撰．台北：華聯出版社　1965年。
3、『太平廣記』（宋）李昉等奉敕撰　清道光二十六年重刊本三讓睦記藏板。
4、『清初雑劇研究』　陳芳　学海出版社　1991年。
5、『唐律疏議釋文』（官板）　王元亮重編　　文化3［1806］　同志社大学図書館藏。
6、合山究氏『貳臣の節烈観と節婦烈女の伝記にあらわれた男性批判』　比較社会文化　第10巻　2004年。九州大学大学院比較社会文化学府紀要。
7、『詩與抵抗(1644－1664)』　王靖献　『東華人文学報』第一期　1999年。
8、『試論王船山的雑劇「龍舟会」』易楚奇　『船山学報』1984年、第一期。
9、『明代文人辨析』　陳寶良　『漢学研究』第19巻、第一期、2001年。
10、『新唐書』（宋）歐陽修，宋祁撰　北京：中華書局，1975.2。
11、『類説』（宋）曾慥輯　北京：書目文獻出版社，1988。
12、『説郛』（明）陶宗儀纂　北京市中国書店，1986。